松本清張

長編本格推理

殺人行おくのほそ道［下］

講談社ノベルス KODANSHA NOVELS

殺人行 おくのほそ道［下］
昭和五七年五月二〇日第一刷発行
KODANSHA NOVELS
定価五八〇円
著者—松本清張 © 1982 SEICHO MATSUMOTO Printed in Japan
発行者—三木 章
発行所—株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一 郵便番号一一二 電話東京(〇三)—九四五—一一一一(大代表)
振替東京八—三九三〇
印刷所—凸版印刷株式会社 製本所—大口製本印刷株式会社
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
ISBN4-06-181002-2 (文一)

松本清張

長編本格推理

殺人行おくのほそ道［下］

叔母の周りの人々が次々と殺されていく……しかも、その土地が松尾芭蕉の『おくのほそ道』に由来している。麻佐子は、五年前、叔父と二人で旅した〝おくのほそ道〟と連続殺人の謎を解こうとして、やがて犯人と覚しき一人の男を知る。しかし、その男もまた、殺されてしまうのだった。それでは真犯人はいったい……。

松本清張（まつもと・せいちょう）

明治42年福岡生まれ。『或る「小倉日記」伝』により芥川賞受賞。『点と線』『砂の器』など推理小説第一人者として活躍。

人行 おくのほそ道［下］

清張

講談社ノベルス

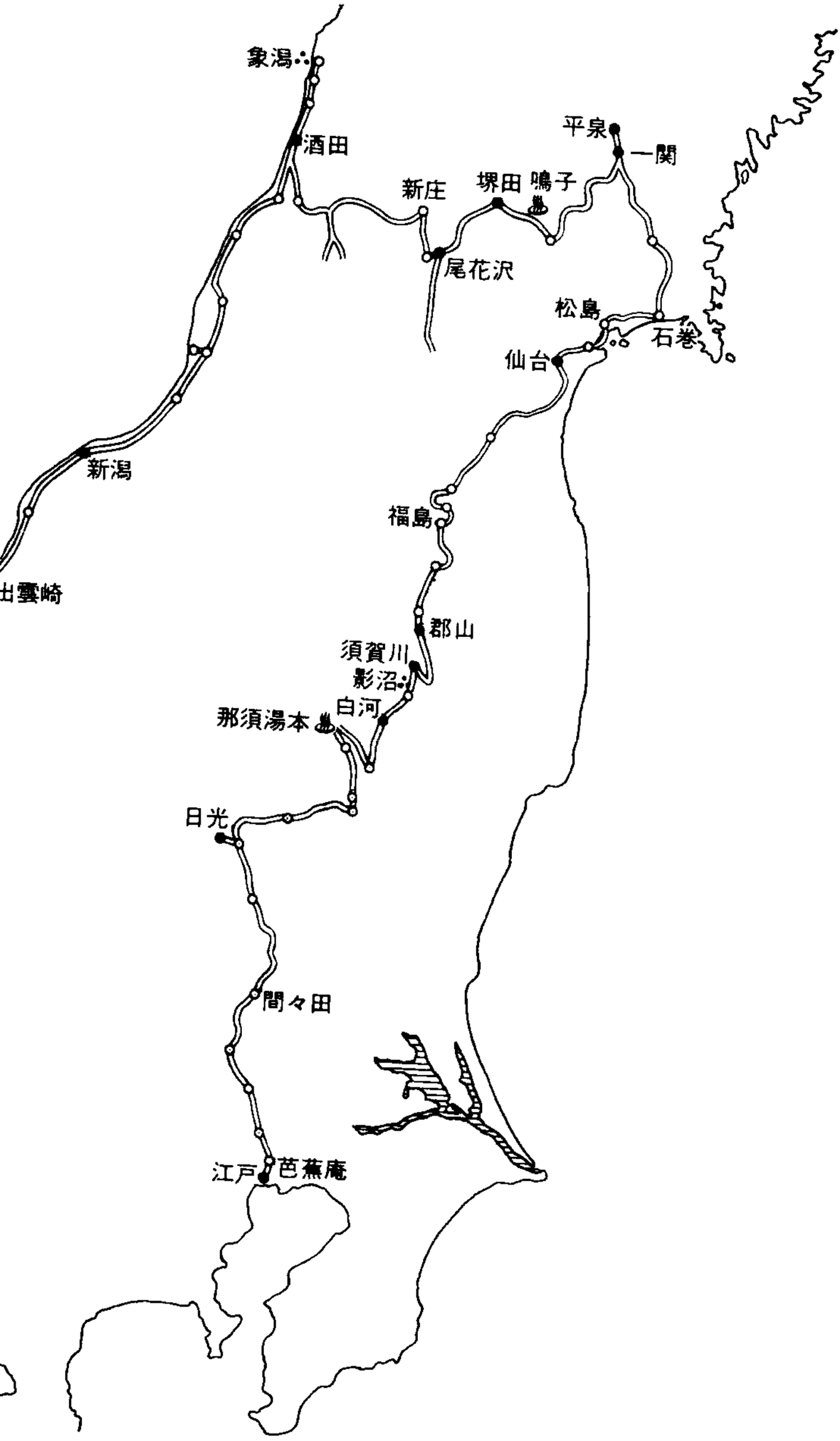
ODANSHA NOVELS

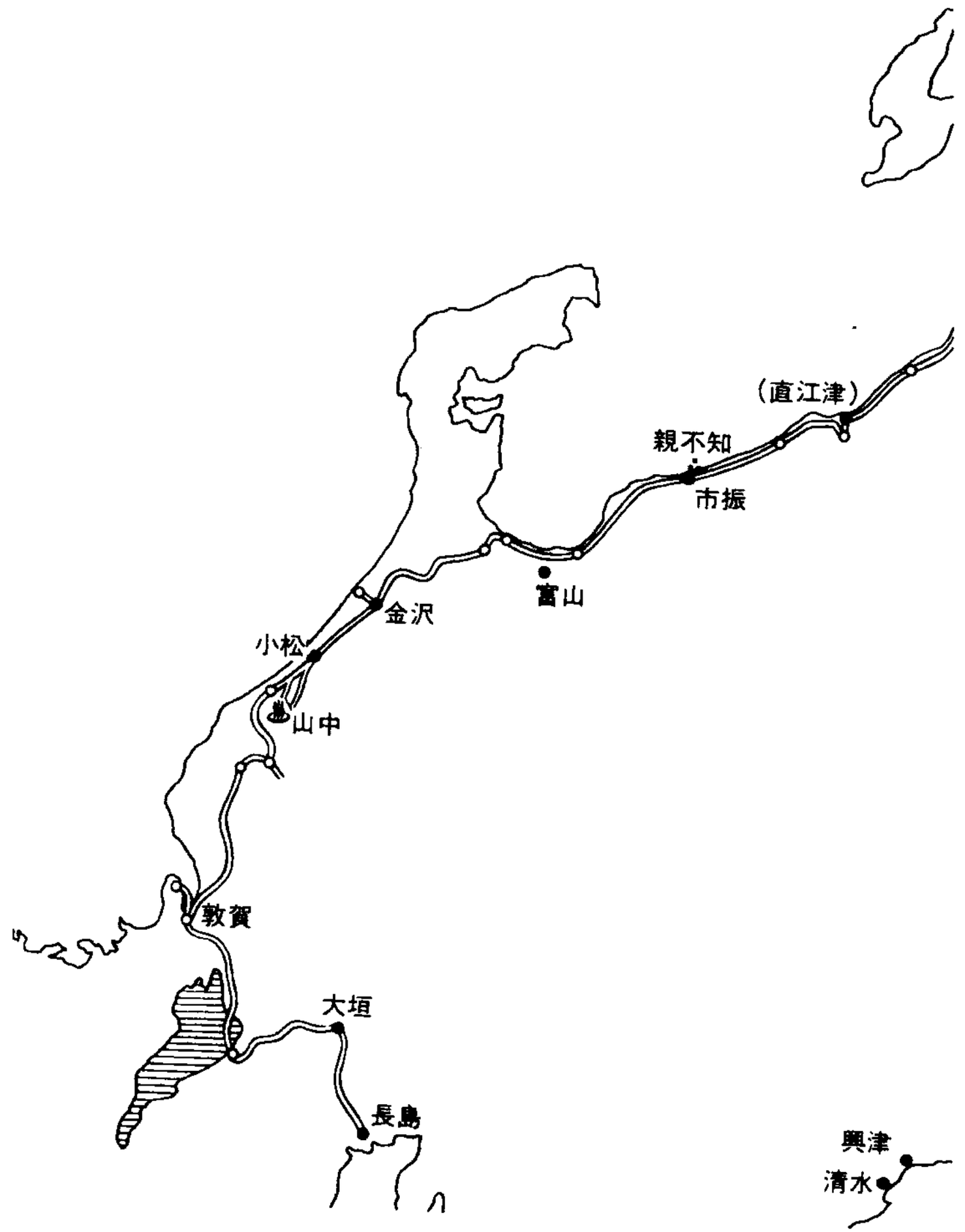
此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

この小説は、昭和三十九年七月から昭和四十年八月まで雑誌「ヤングレディ」に連載した小説「風炎」である。終始『おくのほそ道』に関連しているので、今回、単行本にするにあたり、『殺人行　おくのほそ道』がいいと思うので、これに改題した。

――著者

殺人行 おくのほそ道——地図


象潟
酒田
平泉
一関
新庄
堺田
鳴子
尾花沢
松島
石巻
仙台
新潟
福島
出雲崎
郡山
須賀川
影沼
白河
那須湯本
日光
間々田
江戸
芭蕉庵


(直江津)
親不知
市振
富山
金沢
小松
山中
敦賀
大垣
長島
興津
清水

ブックデザイン　市川英夫
カバーイラストレーション　伊藤憲治

1

麻佐子は郡山に引返した。

「運転手さん、四時五十分の上りに乗りたいんだけど、間に合いますか」

「大丈夫でしょう」

運転手は、時計を見て請け合ってくれた。

道々、運転手は、今の現場の話ばかりしていた。殺人事件の関係者が自分の車に乗ったというので、多少昂奮している。さっき麻佐子が駐在巡査と立話をしていたのを見ていたのだ。

運転手は、いわゆる彼の推理を働かしていたが、やはり興味は、なぜ、京都の人がこんな田舎に来て殺されたかという点だった。

「もし、東京で殺されて、死体となって運ばれたとすると、車しかないですね」

運転手は云った。

「近ごろは途中の検問もないから、乗用車に乗せたところで平気ですよ。もし、危なかったら、後部のトランクにでも押しこめますからね」

そんなことをしゃべっている。

「いつでしたか読んだ推理小説に、そのトランクの隙間から、人間の手だか足だかがのぞいていたというのがありましたが、たしかに乗用車だと、どこにでも詰めこめます」

その場合は営業車は使われないと、麻佐子も思った。まさか他殺死体を運んでくれる車もないだろう。してみると、自家用車しかない。

道にはトラックも走っていた。荷物台の上にはカバーがかけられ、ロープがしっかりとゆわえつけられている。

そうだ、トラックで、あんな恰好だと、分りはしない。

だが、しばらく行くと、大きなミキサー車が向うから

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

来てすれ違った。どこかの工事現場に行くらしく、タンクのような胴体が回転していた。
「それそれ、あのミキサーのようなものだって、死体を中に隠しておくと、外からは絶対に分りっこないですからね。たとえ途中で警官の不審尋問に遭っても、あのミキサーの中まで調べるということはありませんからね」
要するに、車だと何でも死体を運搬できるというわけである。
麻佐子は、運転手の話も興味があったが、彼があんまりしゃべっているので、少なからず危険を感じた。上り列車に間に合うようにと注文しているので、スピードも相当なものだ。しゃべりながらの運転だから、こちらははらはらする。
やっと郡山の駅に着いた。
「どうやら間に合ったようですね」
運転手は、帽子を取って額の汗を拭っていた。駅の時計を見ると、時間ぎりぎりだった。
「どうもありがとう」
いくらか心づけをやって構内に入ると、すでに乗客はぞろぞろとホームに出ている。
麻佐子は、あとから改札口を通ったのだが、列車はもうホームに走りこんでいる。危ないところだった。
だが、車輛の中に入って坐っても、列車はすぐには出なかった。駅のアナウンスでは五分間停車という。急いだあとに待たされると、勝手なもので、ちょっと気落ちがした。
考えてみると、今日は昼飯抜きである。朝早く家を出ているのに今まで空腹を感じなかったのは、岸井老人が殺された現場を見た昂ぶりのせいかもしれない。弁当売りがやって来たので、初めて腹が空いているのが分った。
麻佐子は、窓から駅弁と茶を求めた。それを手に取って、ふと改札口のあたりに眼を投げたとき、彼女は思わず眼を凝らした。
遅れてくる乗客が四、五人、急いでホームに出て来ているのだが、その中に、うすいグレイのスーツを着た女がいた。その顔を見て麻佐子は息を詰めたのである。
――下沢江里子だった。
はっとして、こっちが顔を隠した。江里子は、むろん、麻佐子がそこに居るとは気がつかない。ちょっと、

列車の前後を見回していたが、麻佐子の乗っているところからずっと前方に小走りで進んだ。もう、ベルが鳴っていた。

麻佐子は思わず彼女の前後を見たが、別に連れはないようだった。彼女は簡単なスーツケースを一つ提げている。

麻佐子は、列車が出てからもしばらくは、せっかくの駅弁に箸がつけられなかった。

（江里子は、どうしてこんなところに来ていたのだろう？）

彼女の職業からしてロケなどということだったら、ほかに連れがいなければならない。だが、彼女はどうやら単独のようだった。スーツケースにしても自分で提げている。

折も折というところだ。麻佐子は、江里子も岸井老人の殺された現場を見に行っての帰りかと思った。

もっとも、自分があそこを見に行ったときには江里子の姿は見かけなかった。駐在巡査も別にほかの人間がそこを訪れたとは云わなかった。だが、麻佐子が見かけないにしても、また巡査が別人を目撃しなかったとしても、江里子があの現場を見に行かなかったとは云い切れない。でなければ、郡山あたりから上野行の列車に乗りこむはずはないのである。

なぜ、江里子は、そんな行動をとったのだろうか。

麻佐子は考えこんだ。

江里子が前の車輛に乗っている。あるいは、そこにすでに連れが乗っていて、遅れてきた彼女がいっしょになっているかとも想像した。麻佐子は、よほど前の車輛に歩いて行ってそれをたしかめようかと思ったが、そこに行けば、こっちの姿を逆に見つけられるような気がして足が動かなかった。

岸井老人は、麻佐子が頼んだ隆子の店の経営状態を調べてくれていた。彼の奇禍は、それが原因だったと思われる。

老人を殺した敵の正体はまだ分らない。が、少なくとも、江里子は隆子を岸井老人に紹介したことで、あるいは敵とこちら側の中間に立っているような気がしないでもない。前からそれは考えていたことだが、いま江里子が郡山駅から上野行の列車に走りこんだことで、いよいよ確信がもてた。

といって、その確信とは何だろう。
麻佐子にはまだ何一つ分っていないのだ。江里子が老人殺しのこの事件にどのような立場でいるのか、また老人の調査に江里子がどの程度の対象となっていたのか、一切分っていない。分っているのは、彼女の今の不思議な行動だけであった。
それにしても、と麻佐子は考える。
隆子はどうしているだろう。警視庁から刑事が行ったことは、もう決定的だと思う。老人が貸している債権先のリストの中に隆子の名前があったというから、これは当然訊問があったはずだ。
隆子は、それを夫の信雄に知られることなく、どんな方法で切り抜けるだろうか。
いや、もう、信雄は知っているかもしれない。彼が知れば、繁栄している現在の隆子の仕事とは逆に、どうしてそんなに経営状態が悪いのかと追及するはずである。ひょっとすると、今ごろは夫婦の間に気拙い空気が渦巻いているかもしれないのだ。
もっとも、信雄は隆子が湯河原の宿で北星交通の横山社長と会っていたことなどは知っていない。あれは麻佐子も金輪際(こんりんざい)口から出さないつもりだ。たしかに隆子の周囲には不可解なことが多すぎる。そして、その不可解さは、どこかで必ず岸井老人の死とつながっている。
――北星交通。
麻佐子は、その名前に突き当って身体が一瞬に冷える思いだった。
北星交通は、タクシーとハイヤーの両方を持っている。つまり「車」だ。
岸井老人の殺害事件には「車」が関連している。東京から福島県下のあの現場に、生きている人間にしても、死骸にしても運搬するには、車より以外に方法はない。とうてい列車などで運べるとは思えないからだ。人目に隠れて遠地に運搬するには、車という手段しかないはずだ。
横山道太は、その車の会社の持主だ。車は自由になる。
それでは、横山が岸井老人を殺害したということなのだろうか。横山は、そうなると、老人の調査の対象だったことになる。
老人は、かなり突っこんだところまで調べていた。そ

れは相手側に老人を殺さなければならないほど恐怖を与えていた。横山と、江里子と、隆子と三つの点を結んでみると、老人の調査が、その三角形の中に入りこんでいたという気がする。

こう考えると、麻佐子は、もう、こんな調査はご免だと思った。進めば進むほど怖ろしくなってくる。

北星交通の社長や、女優の江里子などはどうでもよかった。麻佐子は、隆子をだんだん陥れてゆくような気がしてくるのである。

一ばん好きな叔母、そして尊敬している隆子――幼いときから秘かに、ああいう人になりたいと憧憬していた隆子を、いま、自分の手で真黒に穢そうとしている。

麻佐子は、こんなことをしてきた自分を後悔した。もう、何が起っても眼をつむろうと思った。

ここに来たのも、自分のために犠牲になったと思っている岸井老人の霊を慰めたかったのだが、こういうふうになれば、岸井老人には悪いが、彼の最期の地を弔ったことだけで赦してもらおうと考えた。この調べを進めれば進めるほど、自分自身が地獄に落ちてゆくような気がする。

いずれ、警察が岸井老人を殺した犯人を挙げてくれるに違いない。こちらの領分ではないのだ。

しかし、そう考えたとき麻佐子は、同時に警察が叔母の隆子に向っていることを思わずにはいられなかった。

このまま傍観していると、隆子は転落する。それでいいのか。

麻佐子は、どうしていいか分らなくなった。自分の調査を進めると、隆子のイメージが真黒になりそうだし、知らぬ顔をしていれば、今度は警察が隆子を狙いそうである。一方は隆子を穢したくないという麻佐子の理想だが、一方は隆子が転落する現実である。

そうだ、なんとかして隆子を護ろう、と思った。

隆子だけではない。それから生じる信雄との夫婦関係を防禦することである。前のように、いつまでも仲良く美しい夫婦であってほしかった。

やっぱり、このままで進もう。どういう壁に突き当るか分らないが、もう少しやってみようと思い直した。それは信雄と隆子を想うあまりだった。

麻佐子は、こんなときに誰かがいればと思った。自分ひとりでは限界がある。

といって、誰にでも頼めるものではなかった。興信所などというところはもとより、他人には絶対に知らせてはならない。

しかし、杉村もあまり信用はできない。あの男も湯河原あたりをうろうろして、何をやっているか分ったものでないと思っている。

だが、麻佐子は、ここで考え直した。もし、岸井老人の死が少しでも隆子の生活に投影しているなら、杉村もそれを知っているのではなかろうか。いや、杉村なら、必ず何かを知っている。

隆子や江里子に直接当れないとすれば、杉村に当るほかはない。このままひとりで考えていても、穴の中に入っていくだけだった。杉村なら、こちらで何も知らない顔をして当れば、何か分るかもしれない。それに、彼なら気安いし、ときには冗談めかすこともできる。

そうだ、東京に帰ったら杉村に会おうと思った。

列車は七時四十分に上野駅に入った。

麻佐子は、最後まで江里子の傍に行かなかった。その姿さえ見に行くことができなかった。上野駅に降りたとき、江里子の姿を捜すよりも、自分の姿が江里子に見つけられないように用心した。

幸い江里子は前の車輛に乗っている。ホームに降りるとすれば、出口に向って江里子のほうが先になる。麻佐子は、江里子のうしろからのぞいて見るつもりだったが、列車から吐き出された人間が多すぎてよく分らない。それに、丁度、別の線で入ってきた列車もあって、それから降りた客が入りこみ、渦巻くような混雑だった。

あんまり前に進んできょろきょろ見回していると、ふいとうしろから、麻佐子ちゃん、と江里子に肩を叩かれないでもない。

麻佐子は、もしかすると、まだ銀座の店に杉村が残っているのではないかと思った。ちょっと疲れてはいるが、一、二時間くらい帰宅が遅れてもかまわないだろう。

構内の赤電話で店にかけた。

出てきたのは男の声だが、杉村ではなかった。

「杉村さんは帰りましたか？」

麻佐子が名前を云ったので、居残りらしい男の店員は、
「杉村さんは、なんですか、お客さまを送って、いま羽田空港に行かれました」
と答えた。
「羽田に？　何時の飛行機で発つお客さんですか？」
「さあ、それは聞き洩らしましたが、たった今出られましたけど」
「ありがとう」
今から羽田に直行すれば、杉村に会えるかもしれない。
郡山から着いたばかりで疲れてはいたが、気持はまだ昂ぶっていた。このまますぐ家に帰る気がしない。同じ列車で江里子を見たものだから、よけいだった。
杉村と改めて会うには、また明日か明後日店に電話をかけ直し、時間の打合せなどしなければならぬ。それも面倒だった。
夜の高速道路の疾走は快適である。僅か三時間前までは荒涼とした福島県下の田舎の風景だったが、今はさまざまなビルが窓に灯を燦かして両側の眼下に流れている。まるで外国へ一足飛びに来たような感じだった。
ビルが尽きると、海沿いの道となる。遙か向うに羽田の灯が光っていた。
羽田空港に着いた。
杉村を捜したが、人が多いので、すぐには目につかない。たしかに客を見送りに行ったというから、出発口を見回したが、姿がなかった。
こっちの来かたが遅くて、杉村はもう帰ったのかと思った。それとも、見送りと出迎えとを電話で聞き間違えたのかと思い、到着のロビーに行った。
だが、そこにも杉村の姿はなかった。ここは出迎客ばかりなので、人数も少ない。
変だと思って佇んでいると、丁度飛行機が到着したらしく、ぞろぞろと客が中から出てきた。その客の中には、手に笹蒲鉾の土産物を提げている者がある。仙台名物と書いてあるので、仙台からの到着便らしかった。
麻佐子は仕方がないので、またもう一度出発のほうに回った。ここで杉村が居なかったら、諦めて帰るつもりだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com